

ヘレニズム村落の構造を探る

—エジプト・イドゥク湖沿岸コーム・アル=ディバーウ遺跡の考古学調査(2024)—

長谷川 奏	早稲田大学・東日本国際大学客員教授
西本 真一	日本工業大学建築学科教授
小岩 正樹	早稲田大学建築学科准教授
川津 彩可	明治大学建築学科助教
岡崎 伸哉	日本工業大学大学院建築デザイン学専攻大学院生
西坂 朗子	東日本国際大学客員教授

Searching for Site Structure of Hellenistic Village Site: Archaeological Excavations at Kom al-Diba', Waterfront of Lake Idku, Egypt (2024)

HASEGAWA, So	Dr. Visiting Professor, Waseda University and Higashi Nippon International University
NISHIMOTO, Shin-ichi	Dr. Professor, Nippon Institute of Technology
KOIWA, Masaki	Dr. Associate. Professor, Waseda University
KAWAZU, Ayaka	Dr. Assistant Professor, Meiji University
OKAZAKI, Shinya	Graduate Student, Nippon Institute of Technology
NISHISAKA, Akiko	Visiting Professor, Higashi Nippon International University

1. 西方デルタ地域の研究史

エジプト西方デルタ調査隊は、現在、エジプト西方デルタの潟湖(イドゥク湖)のほとりでヘレニズム時代の村落調査を進めている(図1)。この地域は、第26王朝が建設したギリシア人の交易都市ナウクラティスと、地中海沿岸の海運を一手に担ったカノプスとを結ぶナイル支流が走っていた場にも近く、同王朝の強い影響下にあったと推測される。アレクサンドリアが建設されてからは、当該地は首都圏に近接した場として、外来政権が地域権力を掌握する過程での最初期の重要拠点であったと思われる。伝統的なヘレニズム古典考古学では、低地はその生産性の低さから重要性が見過ごされてきた地域であるが¹、近年では各国隊の調査が進み、アレクサンドリアの後背地全体の歴史像が変わりつつある。

2. 研究対象地域の自然環境

エジプトの地中海沿岸では、前5000年頃の海進により塩基性土壌が残されて、集約的な麦作が困難な場となった。当該地の地理的な特徴を見ると、南北軸(VW)では海洋～砂丘～潟湖～緑地と続く偏差の大きな環境の場が活動の舞台となり、一方、平坦な平野が

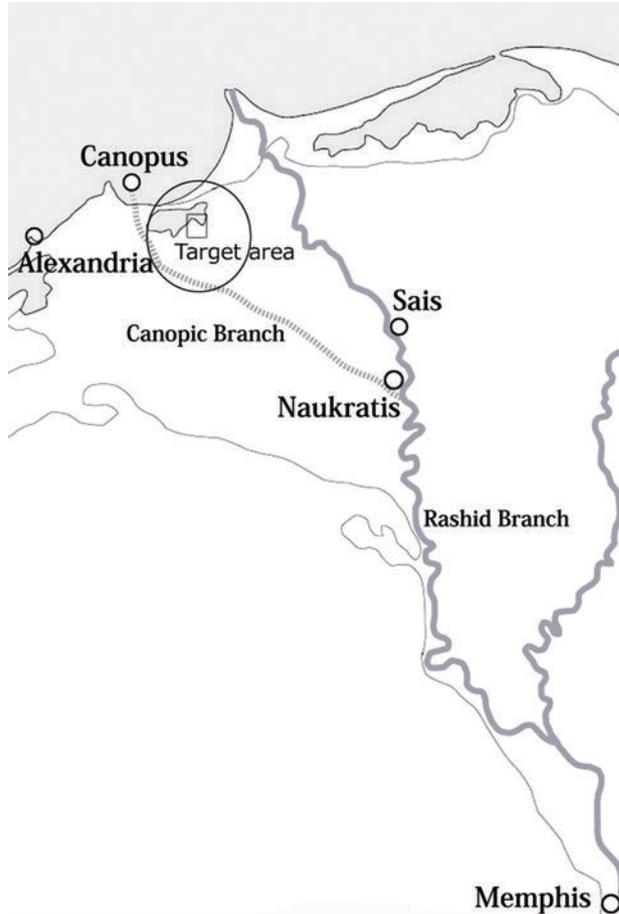


図1 西方デルタの主要遺跡と研究対象地域

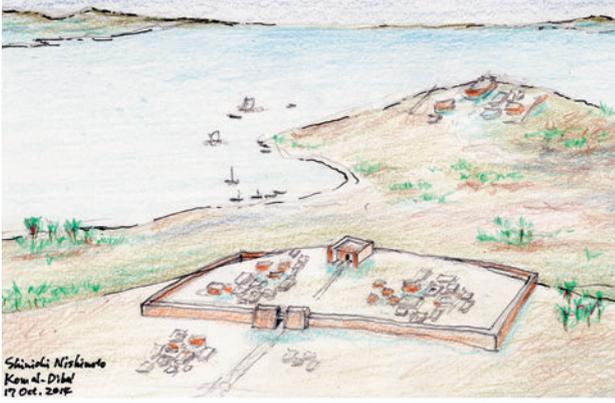


図4 コーム・アル=ディバーウ遺跡の復元図

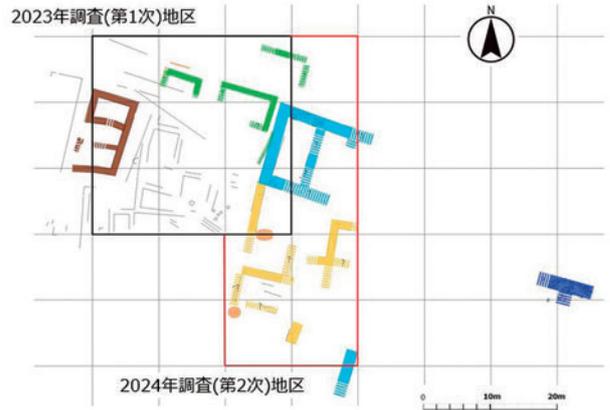


図6 プランの概要と主要な遺構部分

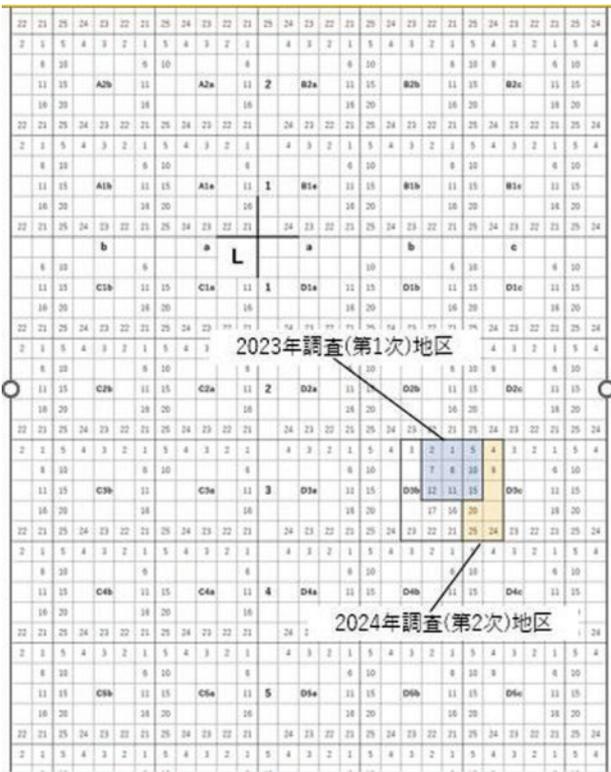


図5 グリッド設定図

や傾く規則的な軸線を有する。さらに丘陵の北部には、内側に矩形の施設を持つ方形の大規模遺構も判読された。地表面に分布する遺物(ローマンランプ、東方シギラータ土器、アンフォリコス等)の年代から、集落の最も活発な活動時期は、ローマ時代(後1~3世紀)にあると推測され、その後北丘陵の探査成果も取り入れて、遺跡の復元図も作成された(図4)。このように、対象遺跡の構造のおおよそが探査によって把握されたことから、2023年に南丘陵頂部のナオス周辺を対象に、第1次の発掘調査が行われた。10m四方のグリッドを計9グリッド発掘したところ、これまで遺跡の構成の中心を占めると考えられてきたナオスの東

側~東南側は当初予想されていたより複雑な構成となっており、みつかった建造物はおおよそ3期に分類されると推測された。

4. 発掘調査(2024)の成果

発掘に際しては、50m四方の大グリッドをまず設営し、それをさらに25の10m四方のグリッドに分割した。このうち、2023年の調査区域の東側にあたる7グリッド(D3c4、9、14、19、20、24、25)を対象とした(図5)。表層の堆積層は薄く、深いところでも20~30cm程度であり、これらを除くと、日乾煉瓦造建造物の基礎部分と建造物の床面(あるいは生活面 Dakka)が現れた。

【遺構】

発掘の結果、それぞれのグリッドで、ナオスの東側および東南側において、日乾煉瓦造の建物の痕跡が確認された(図6)。以下は、それらのうちの注目点である。まず当該地区の建造物の核となるナオスに関してであるが、これまでに見つかっている遺構をクリーニングしたところ、ナオスの入り口および内部の2つほどの部屋の位置にあたる南側半分の地点で部分的にニッチの存在が確認された(図7:a、図8)。今期の発掘エリアでは、2023年調査の東端(D3c10、D3c15)でみられていた壁体に対し、これがさらに東側に続く建造物が現れ(D3c9、D3c14)、これは長矩形の部屋をもつものと思われた。この当該の建造物は、さらに東側に広がるようであるが、その接続ポイント(D3c15)において、これがやや軸線を変えて南側に伸びるように観察されることから、建て増しのような形で建造されたことが考えられた(図7:b、図9)。調査区東南の4グリッド(D3c19、20、24、25)にはこれらの建物

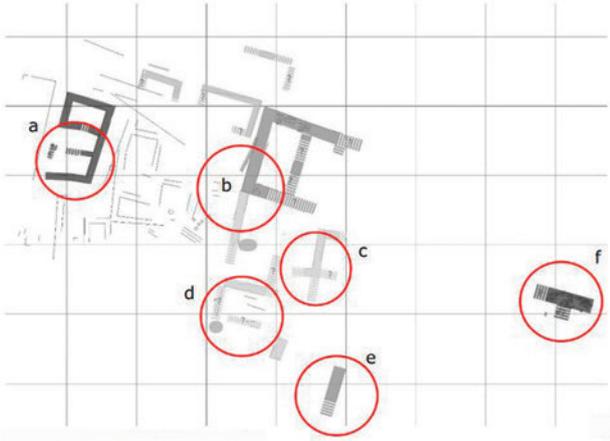


図7 建造物の観察ポイント



図8 ナオスの祠堂周辺



図9 建て増しと推測される部分

の痕跡がみられることから(図7:c、d)、建造物は丘陵頂部の東側全体に広がっていたことが窺われる。さらに今期調査区の東南のコーナー(D3c24)は部分的に傾斜地となるが、ここでもD3c9、10でみられた建造物とほぼ同じ軸線を持つ壁体が見られ(図7:e、図10)、さらに今期の発掘調査区より30mほど離れた地区(D3c16、D5c20を中心とする地区)にある小山のクリーニングを行ったところ、ここからも丘陵頂部の



図10 丘陵南側に向う壁体



図11 丘陵東側の小丘に延びる壁体

建造物とほぼ同じ軸線をもつ壁体を確認されたことから(図7:f、図11)、建造物は丘陵東側のふもと部分にも広がっていたと推測される。

【遺物】

出土遺物は、表層から出土したものと、生活面(Dakka)から出土したものがある。

土器や陶器は、いずれの層のものも、食卓器(Table ware)、調理器(Cooking ware)、貯蔵器(Storage ware)に大別される。土器も陶器も、その素材のうち多くが、シルト(Silt clay)とマール(Marl clay)のものであるが、シルトをベースにしながらもカオリンを多く含む陶土(Ball clay)によるものが見られる。地中海地域から搬入されたと推測される赤色光沢土器の底部片(Terra Sigillata ware)(図12:a)や貼り付けの列点模様を張り巡らせる小型碗のバルボタイン土器(Barbotine ware)(図12:b)の胴部片もみられ、これらは帝政ローマの時代を象徴する遺物と考えられた。ランプ片には、シルト陶土の把手片とマール陶土によるカエル型ランプの胴部片が含まれていた(図12:c)。



図12 土器・ランプ・陶器

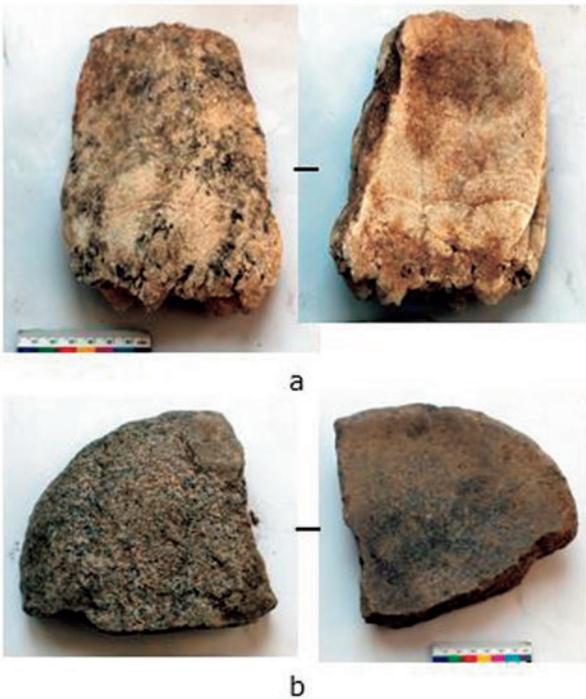


図13 石製容器

また陶器の中には、花模様が描かれたファイアンス陶器も含まれていた(図12:d)。ガラス器には、透明あるいは緑色の素材のものが多く、これらは多く瓶型あるいは碗・皿型になると思われるが、いずれも小破片



図14 ドアの軸受け

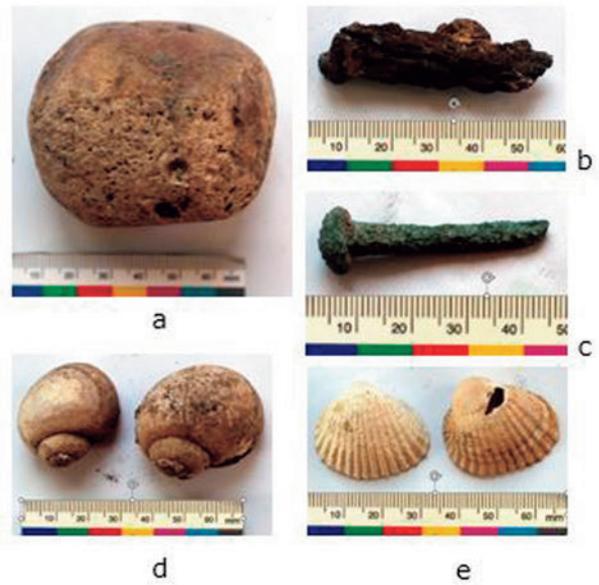


図15 道具類と貝類

であった。石製容器にはアラバスター製の壺がみられ、これには小型のものと、大型のもの(図13:a)がある。また石製容器には、平たい面をもつ小皿があるが、これは花崗岩で作られやや厚みをもつもので、供献の用途に使われたとも思われる(図13:b)。建築材には、ナオス周辺から取り上げられたもので、ドアの軸受けと推測される石灰岩の部材が見つかった(図14)。道具類には、石製の錘(図15:a)、鉄製やブロンズ製の釘(図15:b、c)などがみられた。この他にサンプルとして取り上げられたものに、ガラス製のスラグや炭化物、生活面から集中的に取り上げられた貝類(図15:d、e)がある。コインに関してはいくつか取り上げられたが、クリーニング作業が継続されており、クリアに判読されるものがあれば、次年度に報告したい。



図 16 丘陵の全体風景(空撮)

5. おわりに

発掘調査が始まった当初の3年間は、丘陵頂部のナオスの周囲の構造を解明することにある。2023年調査(第1次調査)と2024年調査(第2次調査)の2年間を終えて、その東部分を中心として、およそ2/3を完了したことになる(図16)。発掘調査の結果、ナオスの東側の建物配置は当初考えられていたよりも複雑で、軸線の微妙な異なりは、建造年代の異なりと推測される。2024年調査では、ナオスの東側にしっかりと作りの建造物が確認され、これに加えて建て増しで南に広がったとも思われる痕跡もみられた、建造物はさらに東側にある丘陵のふもとまで、あるいは丘陵の南側に向う丘陵の斜面部分にまで広がっていると考えられる。2023年調査では、表層からではあるがプトレマイオス2世のコインが得られたことと、2024年調査で帝政のローマ時代(BC1C.~AD1C.)を象徴する土器片が取り上げられたことは、当該遺跡の形成年代に関する大きな手掛かりであり、今後の重要な検討課題である。

■参考文献

- ・ 惠多谷雅弘、中野良志、下田陽久、長谷川奏、エルサイド アップスザグルール 2013:「多衛星データを用いた古代エジプト遺跡 Site No.52の発見について」『写真測量とリモートセンシング』日本写真測量学会、vol.52-4、pp.200-206。
- ・ 岸田徹、長谷川奏、津村宏臣、竹内俊貴、茂木孝太郎「磁気探査と地中レーダー探査によるエジプト・アラブ共和国コマル

ディバー遺跡の調査研究」文化財科学会第32回大会、東京学芸大学、2015/7/11~12(ポスターセッション)。

- ・ 西本真一、長谷川奏 2015:「エジプト西方デルタ、コム・アル=ディバーウの建造物(1)」『日本建築学会梗概集日本建築学会』日本建築学会、pp.7-8。
- ・ 長谷川奏 2016:「地中海、砂漠とナイルの水辺のはざままで—前身伝統と対峙した外来権力の試み」水島司編『環境に挑む歴史学』勉誠出版、pp.308-322。
- ・ 長谷川奏、西本真一、小岩正樹、西坂朗子「ヘレニズム村落の構造を探る—エジプト・イドゥク湖沿岸コム・アル=ディバーウ遺跡の考古学調査(2023)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、2023/3、pp.96-101。
- ・ Blue, L.K. 2010: *Lake Mareotis, Reconstructing the Past: Proceedings of the International Conference on the Archaeology of the Mareotic Region held at Alexandria University, Egypt 5th-6th April 2008*, Southampton.
- ・ de Cosson, A. 1935: *Mareotis*, London.
- ・ Hairy, H. (ed.) 2009: *Du Nil à Alexandrie: Histoires d'Eaux*, Paris.
- ・ Kenawi, M. 2014: *Alexandria's Hinterland*, England.
- ・ Hasegawa, S. and S. Nishimoto, "Recovering the Landscape of the Waterfront at Lake Idku: Archaeological Survey at Kom el-Diba" eds by A. Wahby and P. Wilson, *The Delta Survey Workshop: Proceedings from Conferences held in Alexandria (2017) and Mansoura (2019)*, London, 2022/7, pp. 55-64.
- ・ Mahmud Bay 1872: *Mémoire sur l'antique Alexandrie: Ses fauborgs et environs decouverts, par les fouilles, sondages, nivellements et autres recherches*, Copenhagen.
- ・ Tousson, O. 1934: *Aṭlas tārikhī: al-asfal al-'ard (al-wajh al-bahri)*, al-Qāhira, 1934.
- ・ Wilson, P. and D. Grigoropoulos 2012: *The West Nile Delta Regional Survey, Beheira and Kafur el-Sheikh Provinces*, London.
- ・ Wizāra al-thaqāfa wa wizāra al-itṭiṣālāt wa ma'lūmāt 2002: *Mashrū' nīzām al-ma'lūmāt al-jughrāfī: atlas al-muwāqī' al-āthāriya bi-muhāfiza al-Buhaira 3*, al-Qāhira.

¹ Απο δε Σχεδιας αναπλευουσιν επι Μεμφιν εν δεξια μεν εισι παμπολλαι κωμαι μεχρι της Μαρειας Λημνης, ων εστι και η Χαβριου κωμη καλουμενη. 「スケディアからメンフィスに向って遡行すると、右側にはマレア湖(マリユート湖)に至るまで多くの村があり、そこにはいわゆるカプリアの村がある。」*Strab.* 17.1.22(C803)ストラボンのこの記述は、カノプス支流を船で渡る際にこの研究対象地区の近辺を通過した際に記したものが(カプリアは現在の Abu Hummus あたりか)、北側に広がる砂丘景観は詳述されていない。

² 英国隊によれば、北丘陵は王朝末期の時代層を含む可能性もあるが、中心的な年代はプトレマイオス朝後期からローマ時代を推測し、墓地か港施設があった可能性を報じている(Wilson 2012 *op. cit.* 111)。

³ ナオスの横幅は約660cm、壁厚は76cmで、煉瓦規格は38cmL×20cmWである。ナオスは横長の部屋を南面させた一室構成であり、入口の位置は中心から若干東側にずれている。壁体の厚さも煉瓦2枚分で、小規模の建物としては重厚な作りである。また丘の中腹からは、煉瓦規格は36cmL×19cmWの煉瓦4枚分の堂々とした厚みを持つ壁(144cm)が発見され、丘の頂部のナオスを取り囲む周壁をなすと考えられた(西本他: pp.7-8)。